

人生の災難

加藤 享

【聖書】 ヨブ記1章1～22節

ウツの地にヨブという人がいた。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた。七人の息子と三人の娘を持ち、羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭の財産があり、使用人も非常に多かった。彼は東の国一番の富豪であった。息子たちはそれぞれ順番に、自分の家で宴会の用意をし、三人の姉妹も招いて食事をすることにしていた。この宴会が一巡りするごとに、ヨブは息子たちを呼び寄せて聖別し、朝早くから彼らの数に相当するいけにえをささげた。「息子たちが罪を犯し、心の中で神を呪ったかもしれない」と思ったからである。ヨブはいつもこのようにした。

ある日、主の前に神の使いたちが集まり、サタンも来た。主はサタンに言われた。「お前はどこから来た。」「地上を巡回しておりました。ほうぼうを歩きまわっていました」とサタンは答えた。主はサタンに言われた。「お前はわたしの僕ヨブに気づいたか。地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている。」

サタンは答えた。「ヨブが、利益もないのに神を敬うでしょうか。あなたは彼とその一族、全財産を守っておられるではありませんか。彼の手業をすべて祝福なさいませ。お陰で、彼の家畜はその地に溢れるほどです。ひとつこの辺で、御手を伸ばして彼の財産に触れてごらんください。面と向かってあなたを呪うにちがいありません。」主はサタンに言われた。「それでは、彼のものを一切、お前のいいようにしてみるがよい。ただし彼には、手を出すな。」サタンは主のもとから出て行った。

ヨブの息子、娘が、長兄の家で宴会を開いていた日のことである。ヨブのもとに、一人の召使いが報告に来た。「御報告いたします。わたしどもが、牛に畑を耕させ、その傍らでろばに草を食べさせておりますと、シェバ人が襲いかかり、略奪していきました。牧童たちは切り殺され、わたしひとりだけ逃げのびて参りました。」

彼が話し終らないうちに、また一人が来て言った。「御報告いたします。天から神の火が降って、羊も羊飼も焼け死んでしまいました。わたしひとりだけ逃げのびて参りました。」彼が話し終らないうちに、また一人来て言った。「御報告いたします。カルデア人が三部隊に分かれてらくだの群れを襲い、奪っていきました。牧童たちは切り殺され、わたしひとりだけ逃げのびて参りました。」

彼が話し終らないうちに、更にもう一人来て言った。「御報告いたします。御長男のお宅で、御息子、御息女の皆様が宴会を開いておられました。すると、荒れ野の方から大風が来て四方から吹きつけ、家は倒れ、若い方々は死んでしまわれました。わたしひとりだけ逃げのびて参りました。」

ヨブは立ち上がり、衣を裂き、髪をそり落とし、地にひれ伏して言った。「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。」

このような時にも、ヨブは神を非難することなく、罪を犯さなかった。

【序】 東の国一番の富豪ヨブ

今年も早いもので、もう10月に入りました。今月5回の日曜日は、旧約聖書のヨブ記を学びます。主人公のヨブは、第1章の書き出しにありますように、**東の国一番の大金持ち**でした。羊7000匹、らくだ3000頭、牛500くびき(頭)、雌ろば500頭。それらの生き物を世話する大勢の使用人。子どもも息子7人、娘3人と10人与えられていました。

この子供たちは大変仲が良かったようで、7人の息子が順番に自分の家庭に他の9人を招いて、食事をしていました。父親のヨブは、その宴会が一巡りする毎に、朝早くから息子たちを集めて、彼らの数のいけにえを献げて、神に礼拝するのが常でした。「息子たちが罪を犯して心の中で神を呪ったかもしれない」と案じたからです。このように東の国一番の大金持ちでありながら、ヨブは汚れ

のない(無垢)正しい人、神を畏れ、悪を避けて生きている人でした。

[1] すべてを失った災難

ところが、このヨブに**災難**が次々と降りかかってきたのです。先ずシェバ人が突然襲ってきて、牧童たちを切り殺し、牛 500 頭、雌ロバ 500 頭を略奪して行ったのです。更に天から火が降ってきて、羊 7000 匹と羊飼いたちが焼け死んでしまいました。更にカルデア人が三部隊に分かれてらくだの群れに襲いかかり、牧童たちを切り殺して、奪って行きました。こうしてヨブは、**豊かな財産を全部失ってしまった**のです。

その上、もっと悲しい出来事が起こりました。長男の家で子供たち 10 人が宴会を楽しんでいた時に、突然荒野の四方から大風が吹きつけて家を倒壊させ、**10 人の子ども全員**が下敷きになって、**死んでしまった**のです。

ヨブは衣を裂き、髪をそり落とし、地にひれ伏して言いました。「わたしは裸で母の胎から出た。裸でそこへ帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」ヨブは、このような時にも、神を批難することなく、罪を犯しませんでした。これが第1章に記されている、ヨブに次々と襲った大不幸です。

[2] 妻の叫び

ところが、話はそこで終わりません。**第 2 章**に進みますと、無一物になった**ヨブ自身**が、頭の天辺から足の裏までひどい**皮膚病**に襲われたのです。ヨブは灰の中に座り、素焼きのかけらで体中をかきむしる状態になってしまいました。

そでまで**ヨブの妻**は、彼に付き添って、数々の不幸を共に味わい、耐えてきました。**10 人の我が子を台風で一瞬に失った悲しみ**は、母親としてどれ程深かったことでしょうか。財産をすべて失い、使用人も居なくなりました。毎日どうやって食べていたのでしょうか。その日の食べ物を得るために、恥ずかしい目に遭いながら、働き口を探し、物乞いをし、**屈辱に耐えながら**、毎日を生きてきたに違いありません。

その上に、敬愛してやまなかった**夫ヨブ**が、**全身皮膚病**におかされてしまったのです。灰の中に座って体をかきむしっている姿を見ている毎日。彼女は遂に**耐えきれなくなって**、叫んでしまったのでしょう。

「どこまで**無垢**でいるのですか。神を呪って死んだ方がましでしょう」。この言葉は以前の口語訳では「あなたはなおも堅く保って、自分を全うするのですか。神を呪って死になさい」。フランチェスコ会訳では「あなたは、まだ自分の誠実さを固く守っているのですか。神を呪って死んだらといでしょうに」。

数々の悲惨な出来事に打ちのめされ、あげくの果てに、この惨めな姿の夫の看病を毎日続けなければならない境遇にと落された妻の口からほとぼり出た、悲痛な叫びだったのではないのでしょうか！ 本当にそうです。

2章 11 節以下を読んでみましょう。「さて、ヨブと親しいteman人エリファズ、シユア人ビルダド、ナアマ人ツォファルの三人は、ヨブにふりかかった災難の一部始終を聞くと、見舞い慰めようと相談して、それぞれの国からやって来た。遠くからヨブを見ると、それと見分けられないほどの姿になっていたのので、嘆きの声をあげ、衣を裂き、天に向かって塵を振りまき、頭にかぶった。彼らは七日七晩、ヨブと共に地面に座っていたが、その激しい苦痛を見ると、話しかけることもできなかった。」

遠い国からわざわざ見舞いに来てくれた親友たちも、余りにも惨めなヨブの姿を見て、嘆きの声を上げ、衣を裂き、天に向かって塵を振りまき、それを頭にかぶって、七日七晩ヨブの傍らに座り込んでしまっています。それほど惨めなヨブの姿だったのです。

「神を呪って死ぬ方がましでしょう」という妻の叫びは当然だったと、私でも思われます。しかしヨブは答えました。「お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは神から幸福をいただいたのだから、不幸をもいただくのではないか」何という言葉でしょうか。この期の及んでも、このような言葉を語るヨブの信仰——私もついていけません！

このようにヨブ夫妻を痛めつけることを許しておられる神を、どのように理解したらよいのでしょうか。皆さんは、どう思われますか。

[3] 真の宗教の役割

東北大震災の折りに、レストランを飛び出して逃げた人が、後で自分の食べた代金を払いに来た。また店員が逃げたコンビニで、自分が買った商品の代金を、無人のレジにきちんと置いて出ていった客。このような日本人の行動が、奇跡的な美談ととして、海外に報じられたそうです。誰も見ていなくても、自分の行いの報い、結果は、必ず自分に戻ってくるという仏教の因果応報の教えが日本人の心にあるからだろうと、そのリポーターは述べていました。

この因果応報とは、前世における行為の結果として、現在に於いて幸・不幸があり、現世に於ける行為の結果として、来世に於ける幸・不幸が生じるという仏教の教えから生じたものだそうです。そこで、「善人も悪人も死んでしまえば皆同じだというのは、不公平だ」という考えを抱く多くの人に、受け入れられるようになったのだそうです。

しかし神・仏は、人の良い行いに報いて下さる方だと決めてしまうと、何時まで経っても良い報いがなかったら、拝むに値しない神・仏ということになりはしないでしょうか。もしもご利益がなければ成り立たないとなれば、その信仰とは、結局神仏との取引になってしまいます。ヨブ記 1 章9節でもサタンが神に向かってこう言っています。「ヨブが利益もないのに神を敬うでしょうか。」「ひとつこの辺

で、御手を伸ばして、彼の財産に触れてごらん下さい。面と向かって、あなたを呪うに違いありません」。

この世では「金の切れ目が縁の切れ目」で、離合集散を繰り返します。気に入らず、嫌気がさしてきたら離れようとする心を、私たちは皆持っているのではないのでしょうか。

ヨブは妻に語っています。「わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくのではないか」(2:10)。そうです。私たちでも、「幸いを受けたのだから、災いをも受けるよ」と、何時いかなる時でも、態度を変えずに接してくれる人が傍らにいて、共に生きてくれることほど、人生の幸せはないのではないのでしょうか。この真実な心を育てる——これが、真の宗教の役割りではないのでしょうか。

[結] ヨブの信仰の完成者イエス・キリスト

ヨブ記は、バビロンの捕囚から帰還した後で、BC5世紀頃にかかれたようです。日本に因果応報が伝わり始めた時よりも1300年ほど昔となります。ヨブ記に記された信仰は、日本に因果応報の信心が広がるよりも1300年ほど昔に、ユダヤ人の間に明確に抱かれるようになっていたのですね。

そしてユダヤでは、ヨブ記の信仰が書かれて、約450年後に、神はイエス・キリストをこの世にお遣わしになりました。このお方は、貧しき憂い、生きる悩みをつぶさになめられました。食する暇も忘れて虐げられた人を訪ね、友なき者の友となり、心を砕かれました。そして、十字架につけられて、「キリストなら十字架から降りて自分を救え」と人々から嘲られながら、朝の9時から6時間も死の苦しみを味わい尽くされました。

そして午後3時に、大声で呼ばわれました。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」(マルコ福音書 15:34)。それからもう一度叫ばれました。「父よ、わたしの霊を御手に委ねます」(ルカ福音書 23:46)。そして息を引き取られました。死刑を執行していた百人隊長は思わず語りました。「本当にこの人は神の子だった」(マルコ 15:39)。

神から見捨てられたと思わざるを得ない厳しい十字架の死。しかし「父よ、わたしの霊を御手に委ねます」と神に全幅の信頼をよせてわが身を委ねられた主イエス・キリスト。神はこのキリストを墓の中から復活させて、神の愛と救いをお現わしになったのでした。私はこのお姿に、ヨブの信仰の完成を見る思いがいたします。その意味でヨブは、神の大いなる深い愛を証する先駆者の一人ではないのでしょうか。

主の弟子の一人が述べています。「イエスは、私たちのために命を捨てて下さいました。そのことによって私たちは愛を知りました。だから私たちも、兄弟のために命を捨てるべきです」(ヨハネ第一の手紙 3:16)。私たちもその愛を頂き、どんな人とも共に生きて、支え合って生きていく愛を持つ者になっていきたいものです。

